

## 蓮華寺池と西湖：石野雲嶺の風景

金原, 理  
九州産業大学教授

<https://doi.org/10.15017/8964>

---

出版情報：文献探究. 42, pp.1-10, 2004-03-31. 文献探究の会  
バージョン：  
権利関係：



# 蓮華寺池と西湖

— 石野雲嶺の風景 —

金原 理

東海道本線、藤枝駅から東北の方向に伸びるバス道路が市街地を抜

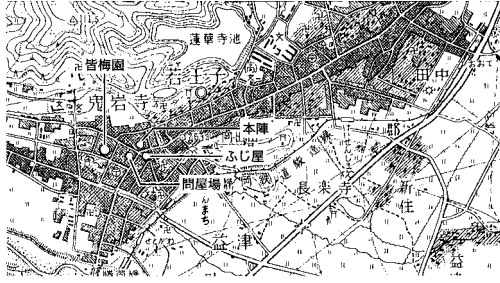


図1 ふじ屋・皆梅園・蓮華寺池

ける辺りに、周囲およそ一・五キロ程の池がある。蓮華寺池と称する湖で、挿入した市街地図<sup>1)</sup>に見られるような位置に、図のような姿で存在する。

地名にふさわしく蓮が湖面を覆い、北側には東南の方角に張り出した小高く盛り上った所があり、登り下りができるように土留めをした階段が作られてもいる。挿入の写真<sup>2)</sup>は市街地(東側)から池を西に見た眺望で、向って右側がその小高くなっている場所である。

平面図では池は西の方向へ深く切れ込んでいるが、この写真の撮影場所からすると、北側の東南にこんもりと突き出ている所も西に深く入り込んでいる場所も低い屏風のような連山に見える。つまり蓮華寺

池は、西、南、北の三方をこの屏風に囲まれ、一方を市街地(東側)に開いているというロケーションなのである。



図2 蓮華寺池(東側・市街地)から西側を望む

幕末から明治初年にかけて藤枝に石野雲嶺(寛政二(一七九〇)年〜明治三(一八七〇)年)という一人の詩人が居た。彼は杭州西湖の孤山に鶴と梅とを友として娶らず、清貧のうちに生涯を送った林逋(和靖)(九六七〜一〇二八)に倣って、蓮華寺池をこの西湖に見立てている。

彼には無論渡清の経験はなく、それは「西湖図」によってイメージされたものであったが、この「西湖図」を通しての西湖のイメージは、古くは背景に白居易を、その後は林逋(和靖)を重ねることによって、日本の文人たちを魅了し続けて来たのであった。サブタイトルを「石野

雲嶺の風景」とした所以は、雲嶺もまたその一人であったことを考えようとするためである。

## 二

雲嶺の閲歴は池部盈進の『長尾藩史譚』(卷三)によれば、

名は世彝。字は希之。通称は金平。号は雲嶺。藤枝の人。一時、詩人としての評判を得た。家が市中の商店(家業は「ふじ屋」という屋号の旅館)<sup>4</sup>の中にあつたため別に小坂に居を構え、梅を植えて「皆梅園」と号し、これを林逋の孤山に擬した。その勤勉に愛でて三人扶持を支給された。明治三年三月六日、八一歳で没。(下略)。

とある。三人扶持を宛がわれたというのは、彼がもと膳所藩の藩士、浅沼家生まれの武士であつたことと関わる<sup>5</sup>だろう。

これに一、二の資料を付加すると、『五山堂詩話』を編集した菊池五山、雲嶺の漢詩文集『雲嶺樵響』に序文を寄せた梁川星巖、同じく彼の詩集『香国為政』に序を認めた伊勢の詩人、斉藤拙堂、森鷗外の「寿阿弥の手紙」の素材となつた、江戸の寿阿弥曇<sup>どんちよう</sup>翁が文政一一(一八二八)年二月一九日に駿河島田の在、桑原<sup>ひつじう</sup>苾堂に宛てた手紙に語られている大窪詩仏ら、東海道を旅する名の知れた詩人たちとの交流があつた。

因に曇翁の手紙には、

天民(詩仏)、客歳加賀の帰り、高堂(貴方、つまり苾堂)の前をば通らねばならぬ所ながら、直通りにて、其夜は雲嶺へ投宿のやうに申候。是ハ一杯飲ム故なるべし<sup>6</sup>。

とある。詩仏とは杯を酌み交わすほどの仲であつたことが知れる。こ

のように詩人たちが藤枝に足を留めたのは一つには、雲嶺が旅宿を営んでいて、彼らのパトロンの存在でもあつたことによる<sup>7</sup>。

また彼は旧藤枝宿の白子町に、屋号を「奥州屋」という大きな造り酒屋を営んでいた大塚荷溪(安永六(一七七七)年(弘化元(一八四四)年)を中心集つた結社、「紅山社」や「水月社」の同人の一人でもあつたが、荷溪は前掲の桑原苾堂ら詩人ばかりではなく、司馬江漢、小林竹洞たち画家、儒者の柴野栗山、書家の市河米庵らとも交流のあつた、駿河随一のパトロンであつた<sup>8</sup>。

雲嶺は『五山堂詩話』(卷七)に、

石蘚、字は緑窠、雲嶺と号す。年少より詩を好み宿悟有るが如し。性睡癖有り、荷溪(大塚荷溪)の齋中に入る毎に、獺祭して晷<sup>とま</sup>を移す。時に或は鼾睡す。痴度笑ふ可し。書懷に云く、「睡多くして天嬾<sup>ちん</sup>を授く。吟苦すれども客痴を嘲<sup>あざ</sup>ける。一歳にして千句を了すれども、半生幾ばくの詩も無し。酒仙我が分に非ず、茶隱<sup>あたか</sup>恰も相ひ亘し。淡極<sup>たん</sup>めて貧も還<sup>また</sup>好し」と(下略)<sup>9</sup>。

との一文を載せる。この「睡癖」については大室幹雄氏による好意的な解釈がある<sup>10</sup>。

ただ、『五山堂詩話』への記事の登載がそのまま五山との親疎のパロメーターにはならない。揖斐高氏が「言われるように、彼は記事の掲載に当たっては掲載料を徴収し、その金額の高によってスペースを決めていたからである。だがしかし掲載記事が「睡癖」のエピソードから始められている所にも見られるように、単に金銭的な関係に終わらない交情を、二人の間に看取することができそうである。

雲嶺の作品は藤枝郷土博物館主催の企画展「石野雲嶺」<sup>11</sup> 付載の年譜によれば、柏木如亭編の『海内才子詩』に三編、『天保三十六家絶句』に二四編、『陰香集』<sup>12</sup> に一編、『近世名家詩鈔』に二二編、『安政三十二家絶句』に二〇編、『近世名家詩鈔』に八編、『文久二十六家絶句』に一九編、『皇朝分類名家絶句』に六編、『明治三十八家絶句』に六編が再録されるなど、その数は少なくはない。

また彼は『雲嶺樵響』を天保九（一八三八）年に、『香国為政』を嘉永六（一八五三）年にそれぞれ自費出版している。その書誌を紹介すると以下の通り。

○『雲嶺樵響』 半紙本、上・下二冊。上、二四丁、前に菊池五山と梁川星巖の序二丁ずつ、計四丁分の序文有り。下、二三丁、終わりに一丁分の跋文を付す。

○『香国為政』 半紙本、一冊。一六丁、前に齋藤拙堂の「皆梅園記」一丁、「皆梅園」の挿絵、見開き一丁、同図解説一丁半。終わりに「乞梅小笈」<sup>13</sup> の記一丁を付す。

この「皆梅園記」は、雲嶺が林逋（和靖）に倣って自宅に梅園を作つて「皆梅園」と称した、その梅園に事寄せながら拙堂が雲嶺を語つたものだが、

老人（雲嶺）<sup>14</sup> 風流温籍にして、夙に善詩を以て江湖の上に聞ゆ。間暗すること半日、其の名の虚からざるを知る。爾来門下生の往来して駅亭を過る毎に、輒ち囑して老人を訪ね其の近作を得て以て攬観す。去年夏余復び東征す。駅亭に宿し、老人の近状を尋ね問ふ、駅吏曰く、数年前、事を謝し、孤山の下の村に老ゆと。余即ち往きて之を訊ぬ。駅中より左折して数武<sup>15</sup>、

槐花 地に満ち、既に尋常の行踪に非ざるを覚ゆ。竹籬茅屋の間、門を得て入る。老人大いに喜び、迎へて其の舎に飲す。園は数畝、経営<sup>16</sup> 位置甚だ工なり。皆老人の意匠に出づ。菅神の祠林仙<sup>15</sup> の廟有り。各其の主を奉ず。賜春館有り、傍らに東叡<sup>16</sup> 王より賜はりし梅を植う。其の他皆梅を以て名とす。小香国<sup>17</sup>、鶴避茶寮、鶯徑、夏玉<sup>18</sup> 泉等の処有り。前は巖田<sup>19</sup> 洞雲二山に對す。風煙愛すべく、佳境始めて顕はる。為に東海に一名勝を加へ、人をして徘徊して之を賞せしむ。（以下略）

と述べる。この孤山とは前述のように、林逋（和靖）がその生涯を送つた西湖の白堤の一部を成す場所に擬えた地名であり、「皆梅園」には林逋（和靖）を祀つて廟まで作つていたのである。

#### 四

前に雲嶺は蓮華寺池を「西湖図」によつてイメージされた西湖に見立てていると述べた。この「西湖図」については既に述べた<sup>20</sup> ところでもあるが、後の論述の便のためにもう一度簡潔に触れる。

女真族に追われて江南の地に落ちのびた宋の王室が、西湖のほとりの杭州に行宮を置き、江南の地が中国の実質上の首府となつた南宋時代以降、西湖の風景が広く人口に膾炙するようになった。そしてこの情報の伝播には「西湖図」の力が与つて大きな力を發揮した<sup>21</sup>。

この「西湖図」には一定の様式があつたのである。ここに挿入した写真は現存する最古のもので、その上最良のものでとされる南宋の画家、伝李嵩筆の「西湖図」で、上海博物館の所蔵にかかるとされるものだが<sup>22</sup>、この絵のように湖の三方から山が迫り、一面が手前側の市街に向けて開けているという構図である。しかも画面の上部が西、手前の市街地が東、



図3 伝李嵩筆「西湖図」(上海博物館蔵)

左側が南、右側が北の方角にあたる。

また画面の右側から上部へ突き出しているのが白居易が治水事業の一環として築いたとされる白堤で、この白堤の一部を成しているこんもりと円形に見える場所が、林逋(和靖)が鶴と梅とを友として住んだ孤山である。

だがしかしこの「西湖図」は人の目で確かめることのできる西湖の景色とはかなりの隔たりがある。人の目では地上のどのような場所からも湖全体を俯瞰することはできない。もしこの構図と類似の視点に立とうとするならば、そこそへりコプターのような乗物に搭乗して高い空間から俯瞰する以外にない。

このような無理な構図を絵に強いているのは、湖全体の風景を一定の紙幅に収めるための工夫であろう。湖全体を一定の紙幅に収めるといふ工夫が後々、湖を中央にして、三方に山が迫り手前が市街地に開けているという、「西湖図」の様式を確立したと見てよい。

西湖を巡る名所として現在にも名を残している「西湖十景」が選定されたのは南宋末期―南宋は帝昺(い)の祥興二(一二七九)年に滅亡のことであったが、「西湖図」と相俟ってこれも西湖が中国全土に名を馳せるきっかけを作った<sup>23</sup>。

一方、「西湖図」は日本へもかなり早い時期に伝わっており、少なくとも「元久詩歌合」の行われた元久二(一二〇五)年以前、遅くとも一二世紀の後半には伝来している。これだけ夙く将来した背景には白居易崇拝熱があった<sup>24</sup>と考えられるのだが、西湖に対する日本人の

思いはその後も絶えることなく、林逋(和靖)に対する憧憬と重なってますます顕著なものになって行くのである。

丸山応挙の十三回忌(寛政五(一七九三)年)に門人がそれぞれ絵を持ち寄って行った応挙追悼の絵画展の目録『展観畫録』<sup>25</sup>(文化四(一八〇七)年刊)には、応挙の弟子奥文鳴が応挙の描いた「西湖図」の下に、「右西湖小景／及西湖水記／二先生因得／杭州西湖水／所作也(以下略)」との識語を寄せているが、この二先生とは応挙と皆川淇園のことである<sup>26</sup>。

こう記されているように二人はそれぞれの著作物を表わすのに西湖の水を取り寄せているし、菅茶山は西湖の柳を手に入れるために伊沢蘭軒を介して、長崎の通事徳見茂四郎にその事を依頼<sup>27</sup>している。また大坂島之内の酒造業の家に生まれた花月庵賀寿(一七八二―一八四八)は將軍家へも献茶をすることのできるほどの茶人であったが、天保四(一八三三)年長崎奉行を介して西湖の水を入手し、この水で観月の茶会を開<sup>28</sup>いてもいるのである。

前に「西湖図」には一定の様式があると述べたが、そのことは現存する作品によって裏付けられる。調査し得たものを列記すると次の通りである。

一、鷗斎筆「西湖図屏風」(京都博物館蔵)

鷗斎は生没年未詳ながら阿弥派に学んだことが分かっており<sup>29</sup>、一五世紀の画家と位置付けられている。

二、伝雪舟筆「西湖図」(静嘉堂文庫蔵)

三、秋月等観筆「西湖図」(石川県立美術館蔵)

画面左上、空に当る部分に明の年号で弘治九(一四九一)和年号、明応五(一四九六)年―閏三月十三日に渡明した旨が記されており、この「西湖

「図」の成立年代が分かる。等観も生没年は未詳ながら、薩摩藩の武士の出で、のちに雪舟の弟子になったことが知られている。

四、丸山応挙筆「西湖図」（僊斎翁へ応挙十三回忌『展観畫録』付載図）

五、富岡鉄斎筆「西湖図」（清荒神清澄寺蔵）  
等である。

いずれの図とも李嵩のように高所からの俯瞰ではなく、視点を下げているので手前右から奥へ伸びる白堤を斜めに、あるいは西側の湖の岸辺の線に平行に屈折させて奥への空間を確保している。前者の工夫は鷗斎の図に、後者は等観の図に見られる。

挿入の李嵩の図の写真では見にくいですが、奥の左右に伸びる岸の線に平行して、蘇軾が築いた蘇堤が描かれている。応挙の図は視点を画面の右奥、孤山の裏側辺りに置き、そこから蘇堤を奥へ辿る構図をとる。そして奥行きを出そうとしてであろうか蘇堤を二本にし——無論、実際は一本——、その二本が手前から奥へ間隔が窄まるように描かれている。このように図それぞれに表現者によってさまざまな工夫が凝らされてはいるが、湖に三方から山が迫り、手前（東側）が市街地へ向けて開けているという一定の様式から隔たるものはない。

## 五

わが庭苑を「皆梅園」と称し、中に林逋（和靖）を祀つて廟を作るほどにこの北宋の詩人に傾倒した雲嶺の詩とはいかなるものか、しばらく林逋の詩と対照させながら、その作品を追ってみようと思う。

まず蓮華寺池に遊んでその景に想を得て詠んだと思われる、次の詩から始めよう。

## 夏日湖上

浮名浮利付浮泡  
去与漁郎訂淡交  
已滑蕙絲羹可作  
新舒荷葉飯堪包  
扁舟只好安孤鶴  
宝劍休誇斬兩蛟  
一曲鏡湖能割否  
餘生擬向此中拋<sup>31</sup>

浮名浮利は浮泡に付き  
去きて漁郎と淡交に訂す  
すでに滑らかなる蕙絲羹作るべく  
新たに舒る荷葉飯むむに堪えたり  
扁舟只だ好し孤鶴を安ずるに  
宝劍誇ることを休めよ兩蛟を斬るに  
一曲の鏡能く割るや否や  
餘生此の中に向けて抛たんと擬す  
（雲嶺樵響）下

第一句は「浮名」（虚名）、「浮利」（泡のような利益）を「浮泡」で受け、この語を「水面に浮かぶ泡」の意と双関語的に使い、と同時に「浮」字を繰り返すことによつて表現にアクセントを置く。二句目の「漁郎」は実景の漁夫を表わすと同時に、『楚辞』の「漁父」や孔子の限界を説く「漁父」（『莊子』〈漁父篇〉）のように、現実世界に拘泥せず、なにもものにとらわれない自由な境遇を象徴する<sup>32</sup>存在でもあり、それが一句目を受けて「訂淡交」と結ばせている。

頷聯の二句は池の水草の繁茂の様子。池表を蓮が覆っていることは前に述べた。頸聯初句は林逋（和靖）の、次に掲げる詩篇などを彷彿させる。

七句目の「一曲」は一巡りに廻らすの意で下字「鏡」にかかり、「鏡湖」の「鏡」と双関語の関係にある。この湖は個有名詞としては、かつて紹興の南にあつて宋以後は田となった場所を言い、白居易の杭州

刺史時代（八二二～二四<sup>33</sup>）越州の刺史であった元稹（微之）がこの湖を褒め、片や白居易が錢塘湖（西湖）に肩入れして詩の応酬のあったことは記憶に留められる<sup>34</sup>。

ただここではこの句の下三字に「能割否」とあるところから見て、「鏡」を意味することに重点があるろう。  
林和靖に次のような詩篇がある。

### 湖樓晚望

湖水混空碧

湖水空碧に混じて

憑欄凝睇勞

欄に憑りて睇を凝すに勞ふ

夕寒山翠重

夕べ寒くして山翠重く

秋靜鳥行高

秋靜かにして鳥行高し

遠意極千里

遠意千里を極め

浮生輕一毫

浮生一毫よりも輕し

叢林數々未編

叢林數々未だ編からず

沓靄隔漁舫<sup>35</sup>

沓靄漁舫を隔つ

尾聯後句の「沓靄」はもやが深くかかっている様、同じく「漁舫」

の舫は小舟の意である。

上湖<sup>ニ</sup>閑<sup>シ</sup>泛<sup>カ</sup>舟<sup>ニ</sup>石<sup>ニ</sup>山<sup>ニ</sup>幽<sup>ニ</sup>因<sup>リテ</sup>過<sup>ス</sup>下<sup>ニ</sup>湖<sup>ノ</sup>小<sup>ニ</sup>墅<sup>ニ</sup>

平湖望不極

平湖望むに極まらず

雲樹遠依々

雲樹遠くして依々たり

及向扁舟泊

扁舟の泊るに向とするに及び

還尋下湖販

還りて下湖を尋ねて販る

青山連石埭

青山石埭を連らね

春水入柴扉

春水柴扉に入る

多謝提臺鳥

多謝す臺に提ぶ鳥

留人到落暉

人を留めて落暉に到らしむ

首聯前句の「平湖」は「西湖十景」の一景、「平湖秋月」に名を残す地名で、白堤の西端、孤山の麓にある。詩題に言う「上湖」、「石山幽」、「下湖」、「小墅」は現在はその名を留めないが、いずれ「西湖」ないしその周辺に関係する地名であろう。

頸聯前句に使われている「石埭」の埭はつつみあるいはあぜの意で、一句は「遠方の山が石で築いたつつみのように連なって見える」の意。

この二編の詩と雲嶺の「夏日湖上」との間には、林和靖の用字、浮生、一毫、扁舟などを介して、表現上での関りを看取できよう。

前に拙堂の「皆梅園記」に見たように、皆梅園には道真と林和靖を祀った廟があった。雲嶺自身もそのことを一篇の詩に託してこう詠じている。

### 皆梅園十詠第五首

北野神威何赫灼

北野の神威何ぞ赫灼なる

西湖遷<sup>36</sup>迹更芬芳

西湖の遷迹更に芬芳たり

風騷高雅梅花愛

風騷高雅梅花愛つ

未必茆堂減玉堂

未だ必ずしも茆堂玉堂を減ぜん

〈右皆林堂〉<sup>37</sup>

（「香国為政」）

林和靖の廟の辺りに植わっている梅は、北野天神（道真を祀った祠の辺りに植わっている梅）の神威にも増して馥郁と薫つていと言う。また友人が雲嶺の古希の祝を福祿寿の図一幅を呈して寿いだの対

して、次のような詩をもつて謝意を表わしている。

鶴子と梅妻

因依伴書屋

好吾香国中

閑杖養恬福

満樹含酸子

累累玉千斛

一株一日資

終老足天禄

咀英仍嚼藥

陰骨同梅瘦

是吾却老方

七句已多寿

鶴子と梅妻と

因依書屋に伴ふ

好し吾香国の中

閑に杖つきて恬福を養ふ

満樹酸子を含み

累累として玉千斛

一株一日の資

終老天禄に足る

英を咀み仍ねて藥を嚼む

陰骨梅と同じく瘦す

是れ吾が却老の方

七句已に多いなる寿

平易な詩でほとんど注釈を要しないが、それでも一、二を補うと、二句目の「因依」は互いに寄り合う意、「書屋」は書物を入れる部屋、「恬福」(三句目)はやすらかなしあわせを言い、一一句目の「却老」とは老をしりぞける意である。

鶴を子とし梅を妻として、彼らを書屋に伴って生涯を送ったであろう林和靖に思いを馳せ、それを三句目と四句目で、それはそれとして自分も香気ただよう皆梅園でやすらかな幸せを味わっている并接受ける。俗語的に使った三句目の「好」が活かしている。

以下は詩題に即して、この梅とともに在ることが長寿の秘訣だと言っているのである。

『雲嶺樵響』(上)に、梅が水に影を落としている姿を詠じた、以

下の一編がある。

水中梅影

清寒波底浸芳姿

正是黄昏印月時

宝鏡一枚先領取

璠妃今夜嫁馮夷

四句目の「璠妃」の璠は「玉」の意。ここでは妃を形容する語として機能しており、「璠妃」とはしたがって、玉の如く美しい妃を言う。句中では水に影を映す梅の隱喩。また「馮夷」は例え『莊子』に「馮夷得之(道)、以遊大川」(「大宗師」篇)とあるように黄河の神、つまり水の神の名である。

夕刻、月を映した水に影を落とす梅を、水神に嫁す美姫に譬えロマンティックに結ぶ。

もとより林和靖には「梅」を題材にした詩は多いが、その中に「山園小梅」と題する次の一編がある。

衆芳揺落独暄妍

占尽風情向小園

疎影橫斜水清淺

暗香<sup>38</sup>浮動月黃昏

霜禽欲下先偷眼

粉蝶如知合斷魂

幸有微吟可相狎

不須檀枝共金樽

清寒波底芳姿を浸す

正に是れ黄昏月を印す時

宝鏡一枚先づ領取す

璠妃今夜馮夷に嫁ぐ

衆芳揺落して独り暄妍たり

風情を占め尽して小園に向かふ

疎影横斜す水清浅

暗香浮動す月黄昏

霜禽下んと欲して先づ偷み目

粉蝶如し知らば断魂すべし

幸に微吟有りて相ひ狎るべく

須みず檀枝金樽を共にするを



一句目の「暄妍」は「爽かで美しい」の意。二句目は水に影を映す梅の様を、三句目は月が仄かに空に懸かる黄昏時に薫る様子を言う。頸聯前句の「霜禽」は「冬の鳥」、後句の「粉蝶」は「白いはねの蝶」を言うが、いずれもここでは「白梅」の隱喩。また尾聯後句の「檀枝」の檀は「せんだん」、これも梅の隱喩。「金罇」の罇は「酒瓶」、金は美称。

さて、この詩と前の雲嶺の「水中梅影」とを比較すると、雲嶺の一篇のとくに初句、二句「清寒波底浸芳姿」、「正是黄昏印月時」が、「山園小梅」の領聯「疎影横斜水清浅」、「暗香浮动月黄昏」に触発されたの詠であることに気付かされるであろう。

大室幹雄氏はこの林和靖の案出した表現が、彼岸此岸の別なく梅花を詠むときの常套的な詠草の粉本となつて、この常套的定式が雲嶺たちの時期には、過剰なまでに濫用されるにいたつた<sup>39</sup>、と述べ雲嶺らの詠出方法を批判的に捉えているが、むしろ古典と認識された材料をどれだけ取り込んで、しかも相手とどう距離を置いて表出するか、そこに腐心することこそ彼らの表現方法であつたと言ふべきであろう。その意味でも「水中梅影」は佳品と評してよい。

いたずらに詩編を引用することは慎まれる。ただこれまでに見た範囲でも、雲嶺の作品の傾向を占うことは可能である。それは西湖の孤山に鶴と梅とをこよなく愛し娶らず清貧に甘んじた林和靖の生涯と、それを背景に生み出された作品に敬愛の情をもって寄り添いつつも、そこからどう距離を保って表現行為を行うか、そこに腐心した詩人、そんな姿を彷彿させるのである。

## 六

手許に加藤一雄の『雪月花の近代—京都日本画の百年—』と題する一冊の本がある。標題の通りの内容が盛られたエッセイ集で、巻末の著者略歴によれば、関西学院大学で美術史を講じた人である。

序文で河北倫明が著者紹介の労を執っているが、それによれば昭和六年に京都帝国大学の美学・美術史科を卒業している由で、また著者がエッセイ集の中で語っているところによれば、旧制の第四高等学校に在学している。河北は著者の博識に触れて、「著者の書くもの（）下敷となる教養や視野についていえば、フランス語や英語の形容などもしばしば登場する」と賛辞を呈しているが、この『雪月花の近代—京都日本画の百年—』の中で著者は、榊原紫峰の「白梅」図を評するのに「疎影錯落した枝上に数点の花が咲いている。」という表現を用いている。

これは明らかに前掲、林和靖の「山園小梅」の領聯「疎影横斜水清浅 暗香浮动月黄昏」の初句を受けての言い方である。著者は、場に応じてこの一句が自己の表現の中に自然に表出されたわけで、それほど北宋の詩人に親しんでいたのである。林和靖もまた著者の教養の中に活きた詩人の一人であつた。

このように旧制の高等教育制度の中で教育を受けて育つたほどの人の教養の中にはこの詩人もまた数えられる。前に彼の詩が日本の文人たちを魅了し続けて来たこと述べたが、それは単に化政期に特出した文化現象ではなかつたことが、いみじくもこのような所からも窺えよう。

## 注

1 藤枝市郷土博物館主催企画展「石野雲嶺」掲載。昭和三〇年頃の

- 藤枝市の地図に雲嶺の家業「ふじ屋」旅館と「皆梅園」を重ねたもの。
- 2 市街地から西を望んだ「蓮華寺池」。写真の提供は堤泰寛氏。
  - 3 昭和五（一九三〇）年刊。
  - 4 注1
  - 5 注1付載「石野雲嶺年譜」
  - 6 須田喜代次・小泉浩一郎注『鷗外歴史文学集』四巻により、人物注など一部を補った。
  - 7 「大塚荷溪と藤枝宿の文人たち」 藤枝市郷土博物館刊 二〇〇一年。
  - 8 富士川英郎・松下忠・佐野正巳編『詞華集日本漢詩』二 汲古書院刊 一九八三年。
  - 9 『月瀬幻影』（中公叢書）五三頁。中央公論新社刊 二〇〇二年。
  - 10 『江戸の詩壇ジャーナリズム―『五山堂詩話』の世界』（角川叢書一九）二二六頁〜二四一頁。二〇〇一年
  - 11 注1。
  - 12 筆者注。
  - 13 武は三尺。
  - 14 庭園の造り方や配置。
  - 15 北宋の詩人、林逋（九六七〜一〇二八）を祀った廟。注6の注に「竹林の七賢を祀る祠」（二二五頁）とあるは誤り。
  - 16 寛永寺の本坊である輪王寺。
  - 17 小香国・鶴避茶寮・鶯径は『香国為政』所収の皆梅園十詠の詩題。香国は花の国。庭園の美しさを小香国・鶴避茶寮・鶯径を使って表現。
  - 18 夏玉は玉を軽く打ちならすこと。泉の水がコンコンと沸き出ているさまをいう。
  - 19 もと一つの山を鬼巖寺（藤枝三丁目、真言宗）、洞雲寺（藤枝五丁目、曹洞宗）二寺があるところからいったもの。なお、14・16・17・18・19は注6二一五頁の注による。
  - 20 『元久詩歌合』と「西湖図」（『詩歌の表現―平安朝韻文攷―』九州大学出版会刊 二〇〇〇年。
  - 21 金文京「西湖と不忍池」（『和漢比較文学叢書』一六一俳諧と漢文学―）汲古書院刊 一九九四年。
  - 22 『日本美術館』五二五頁。「天橋立図を読む」（福島恒徳執筆）小学館刊 一九九七年。
  - 23 注21。
  - 24 注20。
  - 25 この資料は中野三敏氏よりご提供を受けた。
  - 26 この『展観畫録』は見返しに「僊齋翁追薦展観畫録」とあるが、僊齋翁とは丸山応挙のこと、識語を寄せた奥文鳴とは応挙の弟子の一人であること、識語にある二先生とは応挙と皆川淇園のことであることなどについては井上敏幸氏のご教示によって知った。記してお二人に深謝申し上げる。
  - 27 注21。
  - 28 東野治之「歴史学と学際研究―正倉院宝物と法隆寺献納宝物―」（『ヒストリア』一五〇号）一九九六年三月。
  - 29 『日本美術館』四八三頁。「歐齋、西湖図屏風」（井手誠之輔執筆）小学館刊 一九九七年。
  - 30 『日本美術史事典』四〇六頁。「秋月等観」（中島純司執筆）平凡

社刊 一九八七年。

31 『雲嶺樵響』下巻所載。訓み下しに際しては原本の送り仮名以外に適宜仮名を補った。以下同。

32 宮崎法子『花鳥・山水画を読み解く―中国絵画の意味―』（角川叢書二四）六二頁。二〇〇三年。

33 高木正一注『白居易』下（中国詩人選集一三）付載年譜による。

34 例えば「酬<sub>ニ</sub>微之<sub>ガ</sub>誇<sub>ルニ</sub> 鏡湖<sub>ヲ</sub>」（二二二二）の詩など。なお番号は平岡武夫・今井清編『白詩文集歌詩索引』所載詩の通し番号による。

35 長澤規矩也編『和刻本漢詩集成十一・林和靖集』（汲古書院刊）。底本は「内閣文庫本」。以下引用は同書による。

36 原詩は「僊」。

37 第四句の注。

38 底本「晴」意改。

39 注9 五九頁。

〈附記〉小稿を成すにあたっては、藤枝市郷土博物館の学芸員、椿原靖弘氏に『雲嶺樵響』、『香国為政』の複写のご提供を受けたのをはじめとして、種々ご教示を賜った。終わりに記して深謝申し上げる。

（きんばら ただし・九州産業大学教授）